

「初めてのアメリカ—ISP 第7次研修の思い出」

山口光恒

出発前の研修

運良く社内試験を通過して Insurance School of the Pacific (ISP) の第7次研修に参加することになった。出発は1969年7月だったがその前に損保会館で我々参加者を対象にした研修が始まった。私は当時貨物保険の営業部門で仕事をしていたが、この分野ではアメリカに学ぶものはあまりなかったのも、保険監督行政と今後日本での伸びが期待できる自動車保険に焦点を当てて勉強を始めた。当時日本の保険行政は事前認可制 (prior approval) で何から何まで官庁に伺いを立て、その許可を得るシステムであったが、アメリカには許可が不要な File and use という制度を導入している州があり、将来は日本でもこの方向に進むと思ったからである。他方自動車保険は日本で将来爆発的な伸びが予想され、この面での先進国アメリカの実態を承知しておきたいと思ったわけである。勉強してみて驚いたことは、アメリカではどこの保険会社も引き受けを断る不良契約者用の自動車保険プールがあること、また、タリフも離婚した女性のそれがかなり高いなどリスクの細分化が進んでいたことである。この規定はその後廃止されたと聞いたが真偽のほどは分からない。損保会館での研修には当時安田火災のたしか石川正樹さんと言う方の話が印象に残った程度だったが、それよりアメリカで水割りを頼むときにはスコッチ・アンド・ウオーター等と言っではいけない、スコッチャンワラと言えれば必ず来るといった実用的なアドバイスの方が記憶に残っている始末である。実際このアドバイスは大変役だった。

この他アメリカでパーティーが開かれることを想定してにわか合唱団を編成、私はこの指揮者に指名された。ちょこっと練習しただけで出発したが、元々皆が知っている日本の歌なので結構様になり、好評だったのは想定外だった。

初めてのアメリカへ

1969年7月我々一行は羽田空港からアメリカに向けて飛び立った。機体はDC8だったような気がするが Economy は左右3席ずつで、当時は Premium Economy クラスはなく、あとは First Class で我々には勿論縁がなかった。初めてのアメリカということで、搭乗前から興奮していたのを良く覚えている。当時日付変更線を超えるとその証明書を機内でもらえたこと、スチュワーデスが着物姿で対応しており、皆大した用

もないのにコーヒーを注文したりして彼女たちとの会話を楽しんだ。当時直行便はなかったので給油のためにハワイに寄った。この数時間の間に家内に絵はがきを書いてアメリカ第1号通信として出した。その後数時間のフライトでいよいよサンフランシスコに到着。空港から市内までの高速道路（といっても無料だが）に驚いているうちにいよいよ Bankloft way に面したツエータ・サイという Fraternity（寮）についた。すぐ近くに International House があった。当時はヒッピーの最盛期で町では半裸の女性が平気で歩き、New York 等と書いたプラカードを持って、ヒッチハイクをしているのを見て驚いたものである。ここは University of California Berkeley キャンパスの目の前にあるので翌日から大学で講義が始まると思っていたが、実際には大学とは無関係で、歩いて数分の場所を借りて講義が始まった。しかし何を言っているのかさっぱり分からない。寮に帰ってきて皆で復習をするのだがそれでも分からない。

勉強の内容とは別に、着いてすぐ大学のキャンパスを歩いたときの空気の匂いは忘れられない。その後何度かここを訪れたことがあるが、行く度に懐かしい香りがするのは今も変わらない。これは New York、Boston、Washington D.C. などとは全く違う香りである。

Berkeley での生活

寮では二人部屋を割り当てられ、住友海上の西潟さんと一緒だった。当然お風呂はなく皆でシャワーを浴びるのだが、日動火災の廣瀬さんがシャワーを浴びながら「川中島」を吟じているのにはびっくりした。また、ここで生まれて初めて洗濯をした。といっても枕カバーの中に下着を詰め込み近所のコインランドリーに行って洗濯機に洗濯物を突っ込み終わるまで待つのである。良く日新火災の羽山さんと一緒に行き、待っている間にコーヒー屋（といってもえらく殺風景で Café などとはとても呼べない場所）で、安いコーヒーを飲みながらアメリカの印象を語り合ったものである。

週末は仲間と誘い合わせて、バスで San Francisco に遊びに行った。Market Street, Pine Street, Lombard Street, Fisherman's Wharf 等は懐かしい名前である。あるとき皆でちょっと怪しげなショーを見に行った。東亜火災の高木さんは会計係で皆のお金を預かっていたが、万一のことがあっては困ると言ってこれを辞退された事が印象に残っている。また、当時日本では見られない映画も見に行ったものである。いわば何でも新鮮だったのだ。帰りにバスの切符を買うのが一苦勞だった。バー

クレーと言っても通じない、色々試したあげく最後に「棒くれー」といったらなんと切符が買えた。帰りは1回乗り換えが必要である。行程の間に一つだけ TOYOTA の代理店があり、町を見ていてその看板が見えるとバスの両側に取り付けてある紐を引っ張って停車の合図を送り、別のバスで帰ってくるのである。寮ではそれぞれがその日の冒険談を語り合い実に楽しい日々であった。

アメリカで弦楽四重奏を演奏

私にとってラッキーだったのは寮母さんが Violin を弾いたことであった。ある日彼女から近くで友達とカルテット（弦楽四重奏）をやるので一緒に来ないかと言われて勇んで出かけ、そこで他人の Violin を借りて即席のカルテットを組み、大いに盛り上がった。面白かったのは日米共にアマチュアが演奏する曲はほぼ同じであったことである。具体的には Haydon の「ひばり」や「皇帝」、Mozart のハイドンセット 6 曲、Beethoven の作品 18 の 6 曲などで、これらは皆日本でさんざんやったので結構うまく弾けた。そんなことで寮母さんに気に入られたのかどうかは不明であるが、その後ワシントン D.C. に回ったときに彼女のお嬢さん夫婦の家に招かれ歓待されたのも良い思い出である。

ヨセミテと長女の誕生

寮にはグランドピアノがおいてあり、日本からの手紙が毎日その上に置かれる。私は前年 10 月に結婚したばかりで家内が妊娠しており、毎日手紙が来る。嬉しかったがちょっと羨ましがられたこともあった。ある週末を利用して皆でヨセミテ国立公園に行った。その直前に日本から 8 月 9 日に女の子が生まれたとの電報が入った。日本出発前、女の子だったら「苑子」と決めてあったのだが、これが当時の人名漢字にないので受理されないとの連絡が入り、別の名前を早急に決めなければならない。そこでヨセミテに行くバスの中で、皆の奥さんや恋人の名前を書いて貰い、その中から決めることとした。しかしこれから行く先が国立公園でこの最後の園の字を当てれば読み方は「その子」で変わらない。こうして娘の名前は「園子」に決まった次第である。この経緯から未だに娘の名前を皆さんに覚えて頂いているのは有り難いことである。なお、長女は成長して会社員となった後、仲間と熱海—初島遠泳大会に出て自信をつけ、無謀にも翌 1997 年には仲間とリレーでドーバー海峡横断に挑戦し、なんと成功してしまった。これには私も本当に驚き且つ喜んだが、日本の新聞にも出て結構話題になった。そのあと主催者から通知が

来て女性のリレー横断としてはその年最速記録だったとのことだった。

ヨセミテに行く途中、たしか Modest という町に寄り、そこでも歓待を受けた。団長の大東京火災の比嘉さんがお礼のスピーチをしているのに後ろの方が一向聞いておらず騒がしかった。ここで比嘉さんが大声で「シャラップ！」といった途端に会場がシーンとなった。この場面は同席したアメリカ側責任者の Masters 氏にはよほど新鮮だったらしく、その後比嘉団長を紹介するに際して、彼はアメリカ人の聴衆に「黙れっ！」といった男だと言って、皆を笑わせていたことを鮮明に覚えている。私自身はその後アメリカやヨーロッパ、或いは国際会議で講演したことは多々あるが、うるさい場合でも比嘉さんの真似を出来ないままで現在に至っている。それはともかくヨセミテは素晴らしく是非家族でここを再訪したいと思い、今から10年ほど前に San Francisco でレンタカーをして家内とヨセミテで最も格式のあるホテルに泊まり、当時を振り返った。この他当時訪れたところでは Disney Land には後年カナダ駐在の折、家族全員で訪れ子供達のはしゃぐ姿を眺めたものである。バークレーの寮はその後家内と訪れ、昔を懐かしんだ。

アポロ計画と人類の月面歩行

バークレー滞在中は Sausalito のような高級 Resort にある家庭を訪れ、自宅からボートで湾内に乗り出す設計を羨ましく思ったりの経験もしたが、バークレー滞在中にアポロ計画で初めて人類が月に到達した時の興奮は忘れられない。しかもそのときの様子をテレビで見るために集まったものの時間になっても一向始まらない。暫くして放映は東部時間でもう終わっていると言われて、初めてアメリカの広さを実感した。それはともかく、その後この画面を見ても雑音が大きく何を言っているのか分からない。あとで新聞を見て何とか理解した次第であった。

バークレーでの研修を終え、皆で Excursion として全米の主要都市を回った。Los Angeles では、当時東京海上の駐在員だった村瀬さん（後の専務）のお宅に全員でお招きを受けたが、この時初めて接したウイスキーが Chivas Regal で、これは当時日本で知られていたジョニ黒より高いと言われ驚いたことを未だに覚えている。New York に行く前にナイアガラの滝に行った。丁度夏の盛りであったがその周辺はきれいな花が咲き乱れ実に美しい街だ。ここも是非家族を連れて再訪したいと思ったが、その後トロント駐在員として、日本からの訪問者を何度もここに案内するとは当時夢想だにしなかった。今考えると美しい街は Niagara-on-the lake という街で、今でも再訪したい場所の一つである。

解散後の一人旅

New York では現地で修行中の Violin 制作者の友人と自由の女神を見にいったのが印象に残っている。また、New York では当時はやりの革のミニスカートを家内に買って帰ったが、その後ミニスカートが廃れてしまい、役立たずの買い物となった。ただ数年後再度これがはやり次女がこれを着用していたので、無駄な買い物と言うことではなかったといえるだろう。Philadelphia で解散後、1週間程一人で歩き回って帰国した。失敗したのは Houston に行ったことである。ここは NASA がありアポロ計画の中心地でもあったので、ぜひこれに関連した場所を見たいと思って行ったのだが、結果はホテルに一泊しただけで何も見ずに終わった。まず Houston 空港から小さいバスに相乗りして市内に向かったがいくら走っても何も見えない。そのうち相客から、我々はどこかに誘拐されているのではないかとの話が出、皆緊張していた。小1時間ほど走ったところで漸く視界の先に高いビル群が見えたときには、皆歓声を上げて喜んだものである。ホテルに1泊して明日 NASA を見て帰りたいたいという NASA は市内から随分遠くにあり、とても無理だと言われ、結局そのまま次の訪問先に向かった。4年ほど前に Houston 再訪の機会があったが、当時に比べて街は随分賑やかで日本料理屋もあって様変わりであった。

最後にハワイで1泊した。早速あこがれのワイキキビーチに行ったが閑散としている。私は子供の頃、夏は家族で毎週逗子や鎌倉に泳ぎに行っており、その経験からワイキキビーチはさぞ芋を洗うような混雑だと勝手に想像していたのだが、全く様子が違う。これは自分の英語が通じなかったので別の場所に来ているのだろうと想像して、道行く人にここはワイキキビーチかと聞くと Yes という。それでも不安で別の人に同様の質問をすると、やはり Yes という。その時初めて日本の海水浴場が異常なのだと気づいた始末で、そのあとは持参した8ミリのカメラでビーチの風景を撮りまくった。このとき買ったアロハは数年前まで海水浴の時に着ていた。

こうして帰国したのであるが、なんと言っても当時圧倒的に豊かであったアメリカの社会に接することで、大きな刺激を受けた。例えばバークレーの文房具屋で買った便箋の質の良さに感嘆し、バークレーの寮の冷蔵庫にはいつでも牛乳やジュースが入っており、無制限に飲めたことなどである。また、シカゴで見た片道7~8車線にわたるハイウエーには心底驚いた。勉強の方は英語がほとんど分からなかったが、後年アメリカの保険危機を研究しているときに、そういえばこういう講義を受けた

と思い出すこともあった。

その後仕事の関係で欧米を中心に100回以上出張し、ISPで訪問したアメリカの諸都市にも何度も行った。しかしなんと言っても一番印象に残っているのはISPでの初訪米の時である。

宝物は同期の仲間

上記の通りISPの経験は色々な面で大いにプラスになったが、そのうち最大の収穫は全ての保険会社に最低一人は腹藏なく話ができる仲間が出来たことである。第7期は団長の比嘉さんや副団長の有馬さん（富士火災）中村さん（AIU）それに残念ながらお亡くなりになった高木さん（東亜火災）の良きリーダーシップを得て終了後も毎年会合を重ね、ついに今年で50周年を迎える。私は仕事の関係でやむを得ず欠席したり中座するということが多く、幹事の有馬さん、損保協会の井上さん（惜しいことに近年お亡くなりになった）、それに朝日火災の中島さんには迷惑をおかけしっぱなしで頭が上がらない。それでも皆さんに温かく迎えられ、会合後は満たされた気分になれる。こうした仲間を持てたこと、これこそISPに参加した最大の収穫である。残された我々全員が健康に気をつけ、この会が出来ただけ長く続くよう祈ってやまない。

写真編集部掲載



（以下は編集部が山口氏に依頼し、最近の研究‘ゼロエミッション’について書いていただき、追加しました。）

追記：温暖化問題の研究

ほんの少し専門の温暖化問題について付記します。

私はパリ協定(2100年までに工業化からの気温上昇を2°C以内に抑えるという、いわゆる2°C目標を掲げている)は到底実現不能と考えている。この履行のためには世界全体の排出量を21世紀の後半にマイナス(negative)にしなければならないが、京都議定書以来世界の排出は増え続けており、これをDrasticに毎年減少させ、それでも残る排出分はマイナス排出(negative emissions)で相殺してnetで2100より前に排出ゼロ以下とする必要がある。これには2100年までに累計で8000億トン程度のマイナス排出を達成しなければならない(現在の世界のCO₂排出量420億トンの20年分弱)。この最有力の手段はバイオ燃料を用い、そこから出てくるCO₂を回収して地下に長期間貯留する技術(BECCS)であるが^(注1)、このためにはインドからアメリカ程度の面積が新たに必要で、このほか食糧生産との競合、種の多様性とのTrade-offを考えるとこれは無理。このように実現可能性のほとんどない目標を掲げ続けると、排出は増え、気温は上昇を続け、早晚目標は破綻して国際条約への信頼度が低下するだけである。他方CO₂が他の主要温室効果ガスと異なるのはその滞空時間の超長期性で、追加的にCO₂を1トン排出すればこの追加的排出は確実に世界の温暖化につながる。こうしたことから我々が目指すのはin a long runで「多量のNegative Emission無しでのCO₂ゼロエミッション」である。ここで留意が必要な点は2100というような期限を設けないことである。なぜなら2100年までにこうしたことを実現するのは技術的・経済的にextremely difficult, if not possibleだからである。これだと気温目標と異なりどの国・企業・家計等にとっても目標は明確である。この実現のためには発電、運輸、産業(特に鉄鋼、セメントのように製造過程で必ずCO₂を排出する業種)などでゼロエミッションを達成しなければならない。このためにはどのような技術があり、その商業的利用のために克服すべき障害は何か、こうしたことを研究しているところである。

注1 バイオマスは成長過程でCO₂を吸収する。これを燃料として使用するとCO₂が排出されるが、既に吸収した分と相殺するのでゼロエミッションとカウントされる。この排出されるCO₂を回収して地下深くに閉じ込めることで当該分が初めてマイナス排出とカウントされる。この他植林・再植林のケースもあるが、現状では森林伐採の方が多く全体ではPositive emissionsとなっているのが現状である。